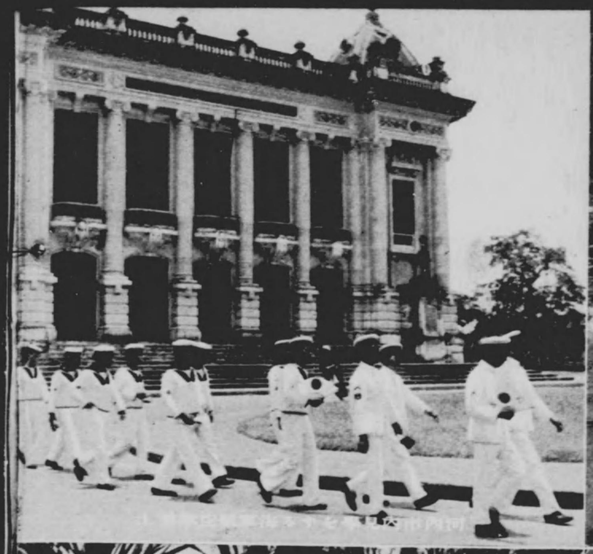
設建と興復

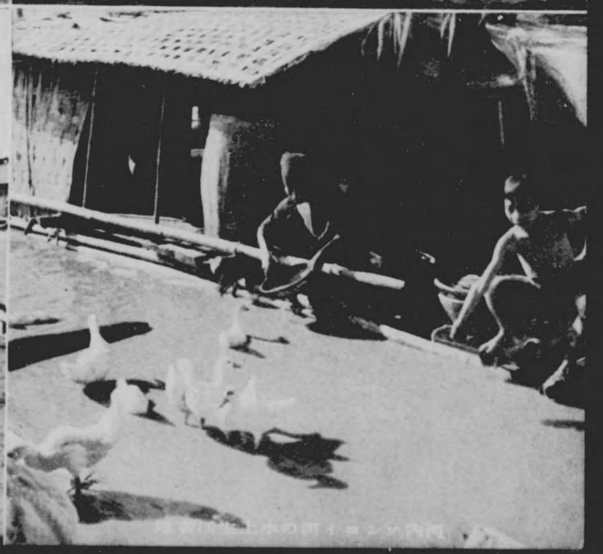
描素の印佛

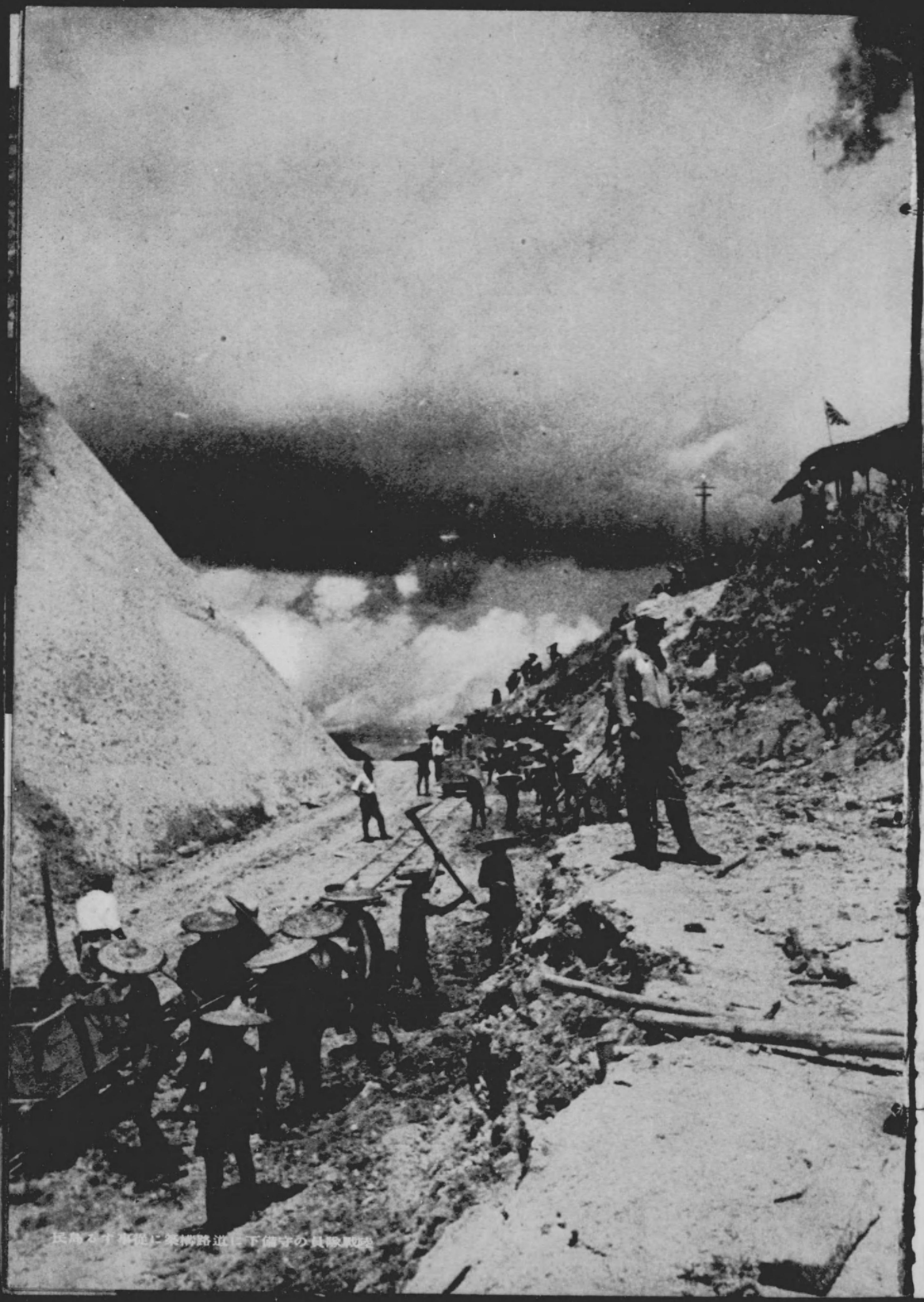


安南人の子守をつけてプールに遊ぶ
佛印人（河内にて）

園公クツラチア中市内河印佛

南部佛印ナトラン上海堂々たる
我が上海と圏船が我戎の





長島ゴイ事從に柔橋路道に下備守の員隊戰線

復興と建設

蘆溝橋畔一發の銃聲は、東亞に於ける二大國家たる日支を劍戟の間に相見るの動亂を勃發せしめた。當時日本は事變の擴大化を防止するため、あらゆる努力と忍ぶべからざるを忍んで來たが、支那は抗日侮日の銃火を停止することなく、事變をして遂に全面的に擴大せしめ、第三國の援助を賴りに長期化せしめて行つたのであつた。

皇師一度び暴支膺懲の軍を起すや、支那大陸の海に陸に空に、抗日勢力を制壓し、青史に燦たる武勳を樹て、現在の如く蔣政權をして邊陬の一隅に逼息せしめ、嘗ての戰火の地には和平の曙光大らかにさし初めて、日支提携の大目的は完成の域に近づきつゝある。

帝國の意志は飽迄も領土的野心あるなく、また賠償の要求になきことは帝國の屢次の聲明に明かな如く、日本の望むものは支那國民が歐米依存の迷夢より醒めて日本と提携し、東亞の安定に邁進することを念願するのに他ならない。今事變が聖戰であり、皇軍出師の目的が東亞新秩序の建設に置かれる所以である。

かくて破壞に代へるに建設を以てし、征服に代へるに撫育を以てする皇軍の行動は、一面戰爭一面建設の大旆の下に、着々としてその實効を擧げ、戰火に荒れた大陸の處々に、今や建設と復興の朗音が轟き渡つてゐるのである。

しかしながら、破壞の易くして復興の難きことは今更言ふまでもない。蔣政權永年の秕政と、抗日軍の焦土戰術は、支那をして無慘の境たらしめて居り、今事變の激鬪は更に破壞を猛しくした。これを建設し復興して、四億民衆に安居樂業を與へ、支那をして新生國家たらしめる事業の困難さは、筆舌に絶するものがある。

今や皇軍が抗日政權の徹底蹂躙を停止せぬ反面、建設と復興に良き指導者たり、唯一の協力者として日夜粉骨碎身する尊き姿は、誰か涙なくして仰ぎ見ることが出來るであらう。

し越引へ口虹

療施料無にめたの衆民ぬら知を藥醫

復居民歸

衆民も込れ流に口虹たれさ放開

民市海上る入見でん喜を文告佈の止廢證行通

支那事變が上海に飛火して以來上海の虹口、閘北、楊樹浦一帶の蘇州河以北地區には、作戰と治安の必要から通行證を所持した者以外の一般支那人の通行を禁止してゐたが、砲煙遠く奥地に去つたのと、我方の警備の成果があがつて治安が回復したので十五年二月十五日午前零時を期して陸戰隊警備地區内の支那人の通行制限を撤廢した。

蘇州河を南北に挾んで、通行の杜絶えてゐた租界の兩地區は、この日から全く自由な交通が許されたので、支那人はもとより第三國人にも少なからぬ利便が與へられたわけで、なほ作戰中にも拘らずこの英斷に出た我方の措置には感謝が寄せられたのであつた。

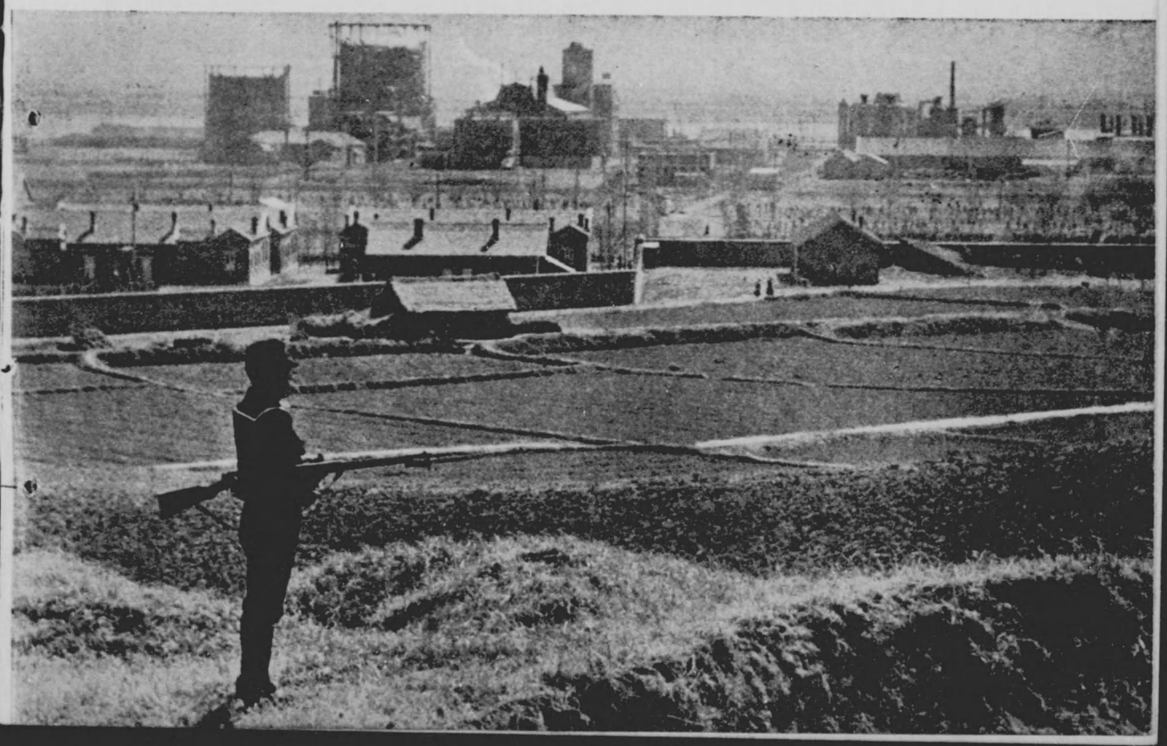
撫宣と備

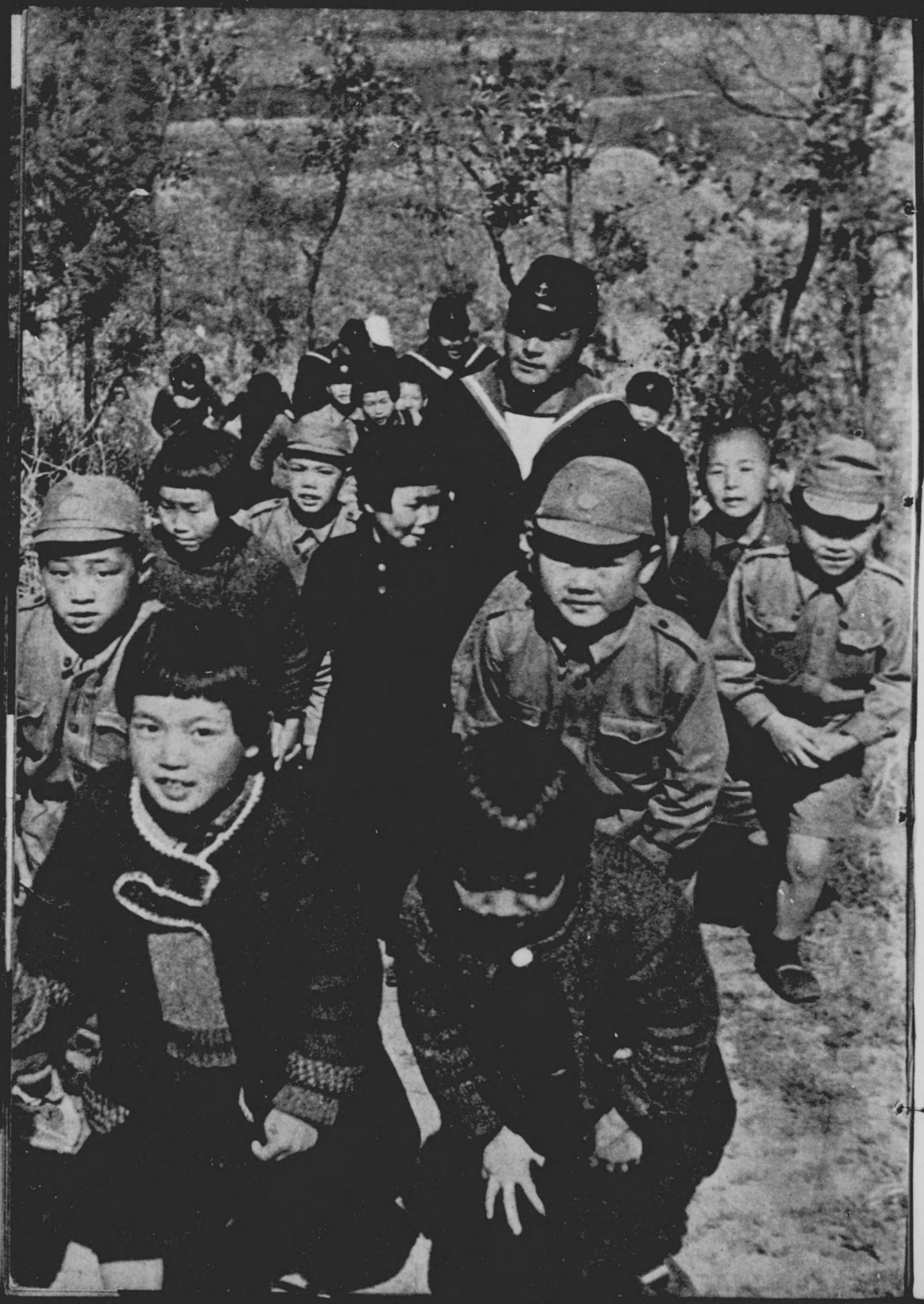
衆民るすを意同に葉言の班撫宣

動出の邏巡

兵隊も支那の子も一緒になつて風船あそび

工場地帯を警備する





兵隊さん僕も飛行機をやつて頂載、と大はしやぎの子供達。

海軍のおぢさん

子供は何時も朗らかだ。日本の子と支那の子と一緒になつて兵隊さんと相撲する。

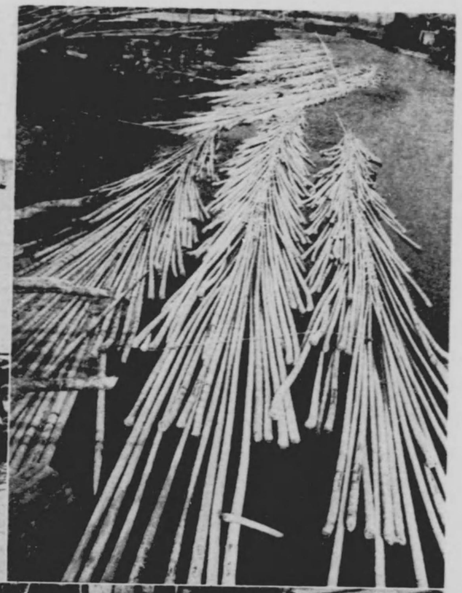
水路建設

クーリク江珠た見らか中空

クリーク

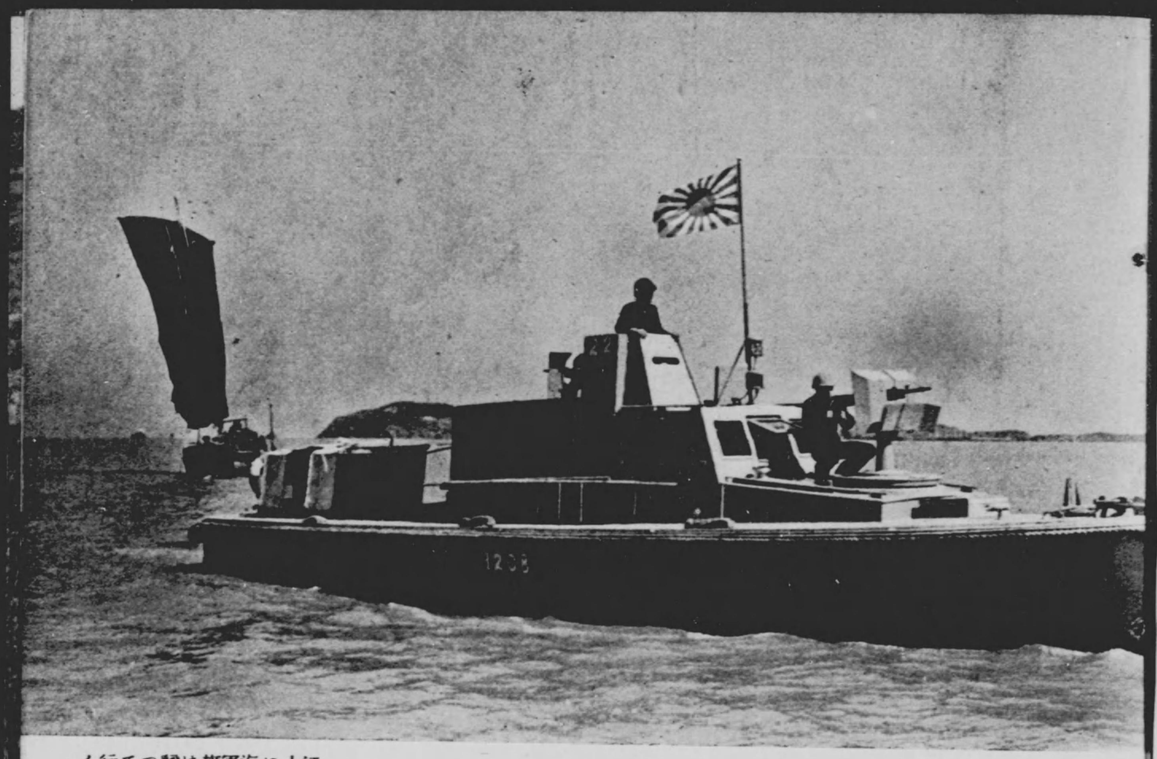
長江下流上海を中心にして蘇州、無錫、杭州、寧波一帶の平地には大小幾千條のクリークが神經系統のやうにはしつてゐる。住民にとつてクリークは道路であり、水道であり、灌漑用水であり、漁場であり、時としては浴場でさへある。川底の泥や藻は肥料となる。

元來クリークは長江の氾濫で水の底になる耕地を干拓するために、つくられた排水溝であるが、これが同時に灌漑用に充てられ、交通にも利用されて無くてはならないものになつた。クリークを行く舟は大小さまざまで、中にはそのまゝ長江に漕ぎ出し、海に浮べられる大きなものもある。こうして舟がクリークに行くと畠の中で舟が動いてゐるやうな江南特有の變つた風景を描き出すのである。



彼、民蛋む住にクーリク、江珠
。だのな上のクーリクは都の等

衆民む住にクーリク



江上に海軍旗は飜つて行く。

民船の臨檢

支那大陸は水路が非常に發達してゐて、空から見れば恰も水に圍まれた無數の島から成つてゐると言ふ感じを受ける。從つて水路交通は支那の產業經濟を支配するものであり、軍事的に見ても水路の研究は極めて緊要である。支那大陸を開發し復興建設を行ふためには、水路問題を充分理解してかゝらねばならぬ。殊に長江流域、珠江下流地帶に於ては水路こそ生活々動と不可分の關係にあり凡ゆる問題の基礎をなすものである。

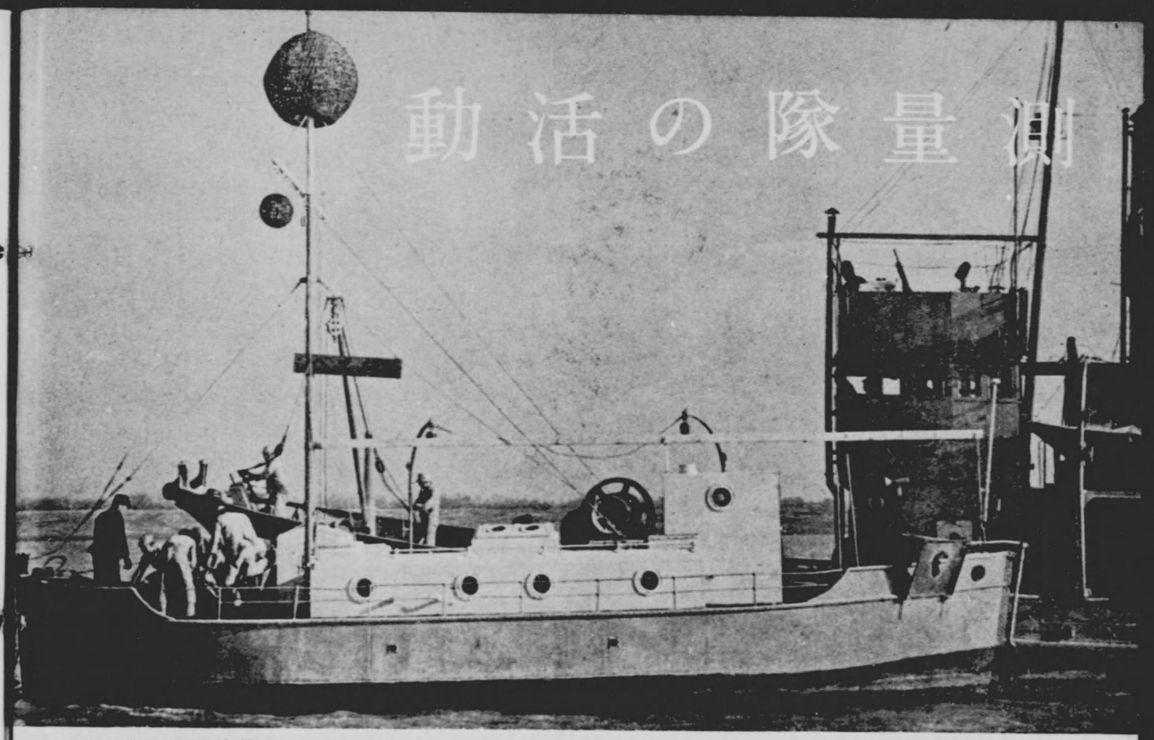
民船をつぶさに調べる。

砲艇隊の活動

揚子江本流は上流深く軍艦が遡れるが、その大小の支流はもつと船體の小さい進退の自由がきく舟艇を用ひる方が利便が多い。海軍砲艇隊がそこで生れた。河川や湖沼を縱橫に乘廻す［蚊艦隊］である。沿岸部落の匪襲を急援し、良民の生活を保護し、敵の機雷や木梢陣地を處分し、また新生中國の恩澤なほ及ばない地方の自治を指導し、物資を給し、衛生を改善するなど、砲艇隊の成し遂げた仕事は大きくかつ廣い。

測量隊の標識運搬

測量隊の活動



、業作置設識標の上江、

海圖や水路標識の艦船航行に缺くべからざることは云ふまでもないがこれを作製設定する勞苦の悉くは測量隊の負ふところ。その任務の關係上測量隊は平時でも敢然未知の水域に乘入れて、あらゆる惡條件と闘ひながら精密な調査を遂げなければならない。況んや戰時、作戰の必要はいつ何時どんな所へ艦船を突入させなければならないか量り難い。そんな時先頭に立つものは常に測量隊である。大波に浚はれさうな小艇に間に合ふ限りの器械を積み、敵彈雨飛の中に突進する「急速測量」——それは後につゞく部隊を一刻も早く目的地點に揚陸させる爲めの命がけの水先案内だ。機雷があるかも知れない。敵の隱蔽陣地が睨んでゐるかも知れない。第一、測量隊自身も未知の水路だ。測量しながら友軍を導く危險、心勞、努力。敵前上陸の更に先に挺身するもの！　それが戰時の測量隊員である。

毎日變る水深を圖にして表はす。航行するものは一目して今日の水深が解る。

大運河の開通

浙江省杭州に始まり嘉興、蘇州から鎭江に出て揚子江を横切り高郵、淮陰より山東省を經て遠く天津に達する運河を大運河と云ひ、その延長は一三〇〇キロ、世界最長の運河であり、北支中支を結ぶ重要な交通運輸路である。

中支の米をはじめ稅物を北支に運ぶため隋の煬帝が堀鑿に着手し、元朝に至つて揚子江と白河の間が完成し、清朝康德の代には撞河の水流を利用して運河の擴張が行はれ乾隆五年に竣成した。

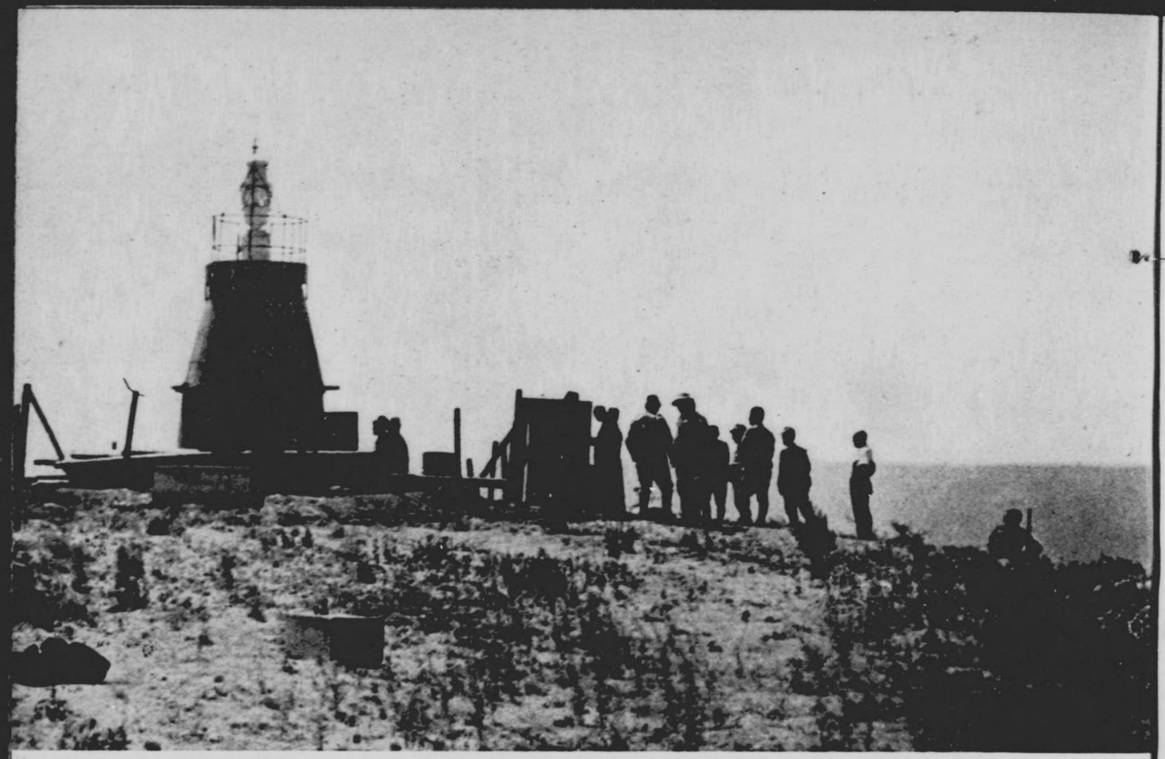
今事變で敵軍は敗走するに當り嘉興及び淮陰附近に於てこの運河を破壞し交通を杜絶せしめてゐたが、昭和十六年春より夏にかけて皇軍警備の下に關係者によつて開通せられた。

嘉興附近陸門に於ける大運河開鑿作業。

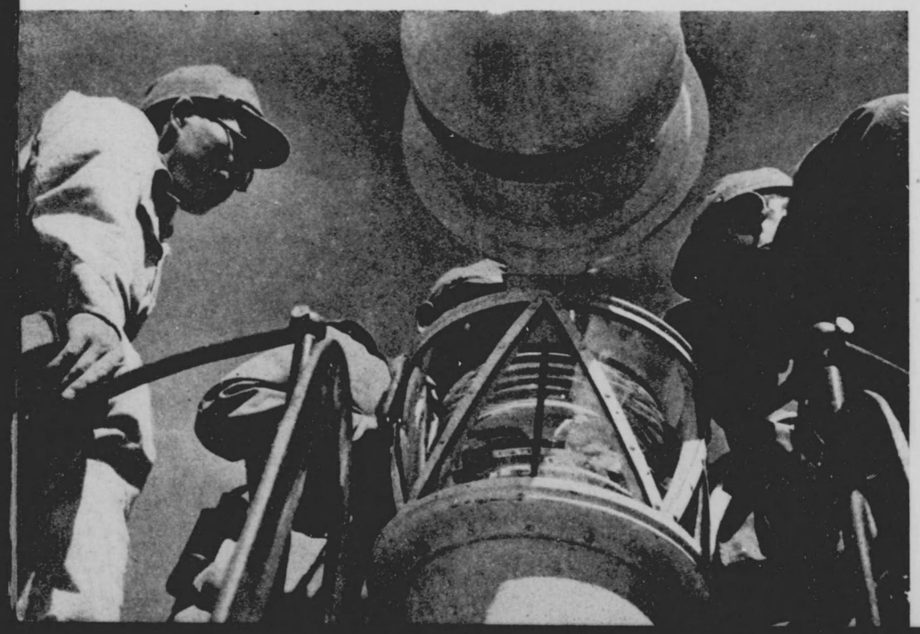
開通直後の民船

大運河の開通式現場

嘉興附近にて大運河を開鑿する苦力達



臺燈港雲連

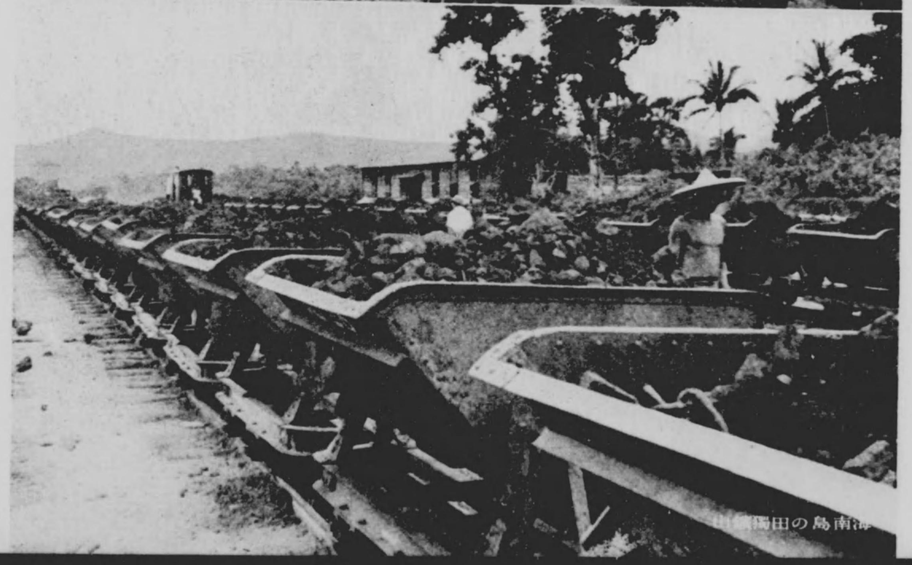


置設の臺燈

海南島の建設

無盡の鐵鑛を運ぶ

海南島の瓦煉



海南島の田鑛

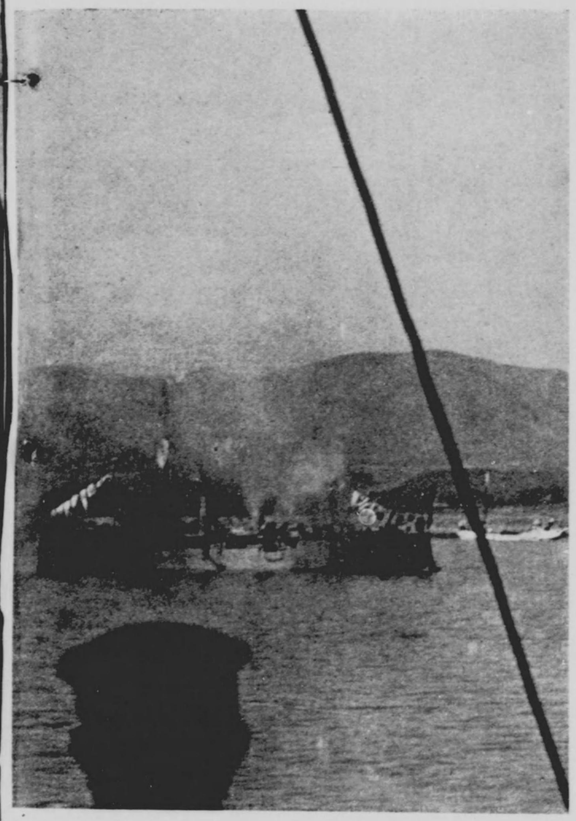
海南島は種々の角度から見て極めて重要視されるが、取分け同島の持つ豐富なる資源、熱帶特有の產物等は現下の我が國にとつて極めて大事なものである。

これがため海軍は卒先して海南島の復興建設を行ひ重要資源の開發を進めてゐる。

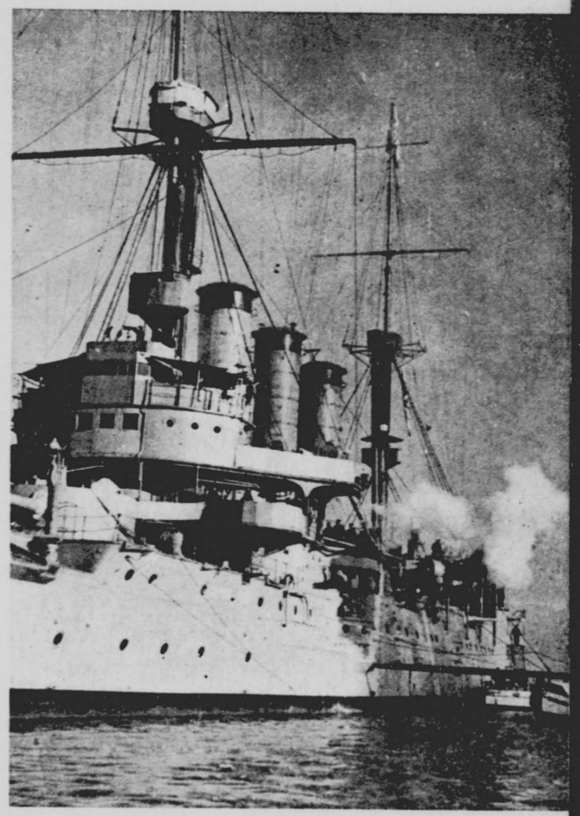
橋梁の架設工事

汪主席の煙草の火が江上の風にさえぎられたのでの島田長官が持ち合せた紙によせて主席の火を助けてゐる微笑ましい一瞬

新中國の誕生



新中國政府承認 海興答砲



新中國政府承認 出雲の祝砲

吉田海相祝電

汪氏等先覺諸氏の献身努力結實して茲に支那中央政府の樹立を見るに至り、今や日支相提携して東京新秩序の建設に邁進せんとす、誠に慶祝の至に堪へず、惟ふに日支兩國互助敦睦克く共榮の實を擧げ、以て世界平和の確立と人類福祉の增進に寄與すべき共通の使命を有し、之が完成には支那新中央政府今後の發展强化に俟つ所大なるものあり、茲に支那新中央政府の前途を祝福し、彌々更生新支那の興隆發展を期待して熄まず。

昭和十五年三月三十日

海軍大臣海軍中將

吉田善吾

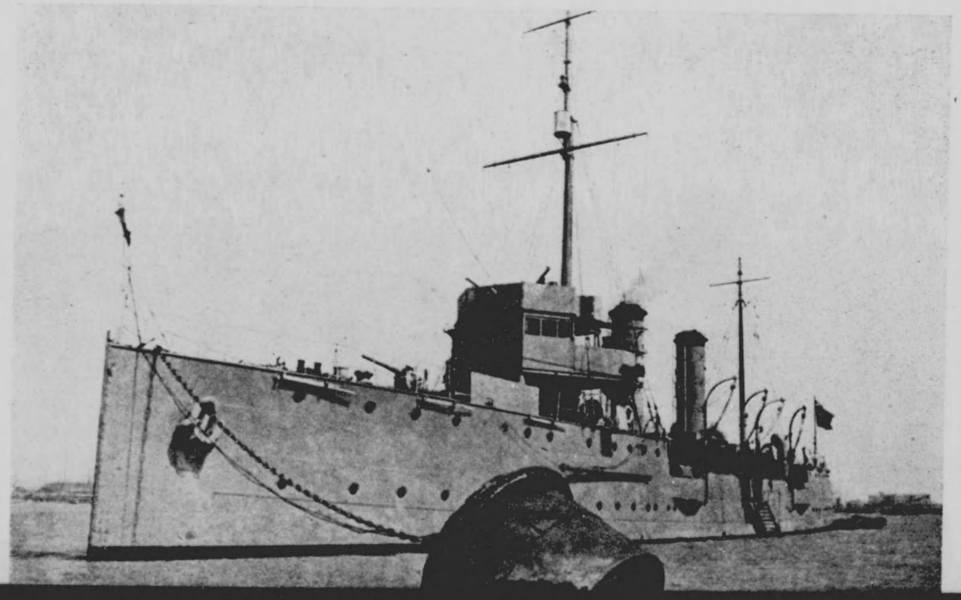
新中國政府へ捕獲艦の讓渡　政府代表汪主席の受領書朗讀。

中國海軍の更生

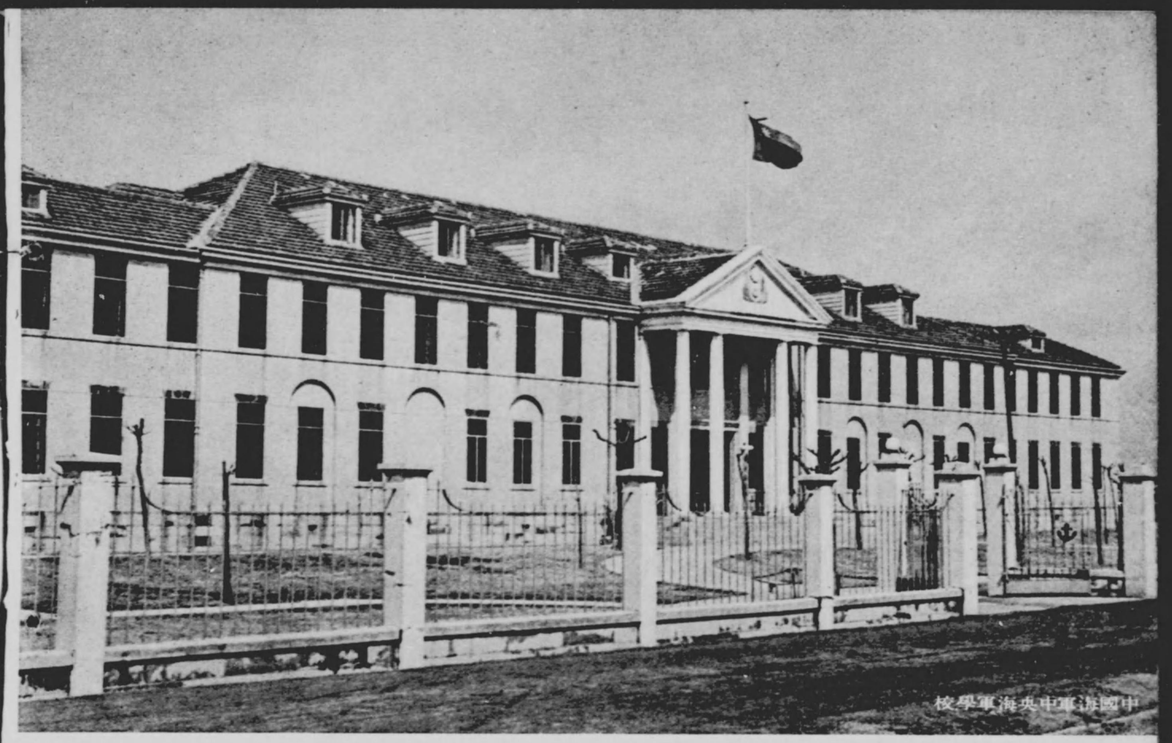
蔣政權の持つた海軍は事變勃發後幾何もなくして帝國海軍の攻撃により壞滅して了つたが帝國海軍は治安警備の必要上、新中國海軍の更生に努め、北支については威海衞、青島を中心に、中支に於ては南京、上海、又南支に於ては廣東に夫々所要の基礎的準備を進めて來た。

汪主席を主班とする國民政府が、帝國政府によつて承認せらるゝと共に帝國海軍は新中國海軍に必要なる艦艇其他の讓渡を行ひ、又中央海軍學校の設立に協力し、以て新中國海軍の更生に多大の貢献をなしつゝある。

斯くて威海衞の劉公島には昭和十五年十二月十三日、四十年振りてイギリスに代つて中國海軍軍艦旗が掲揚せられ、中國側に多大の感銘を與へた。

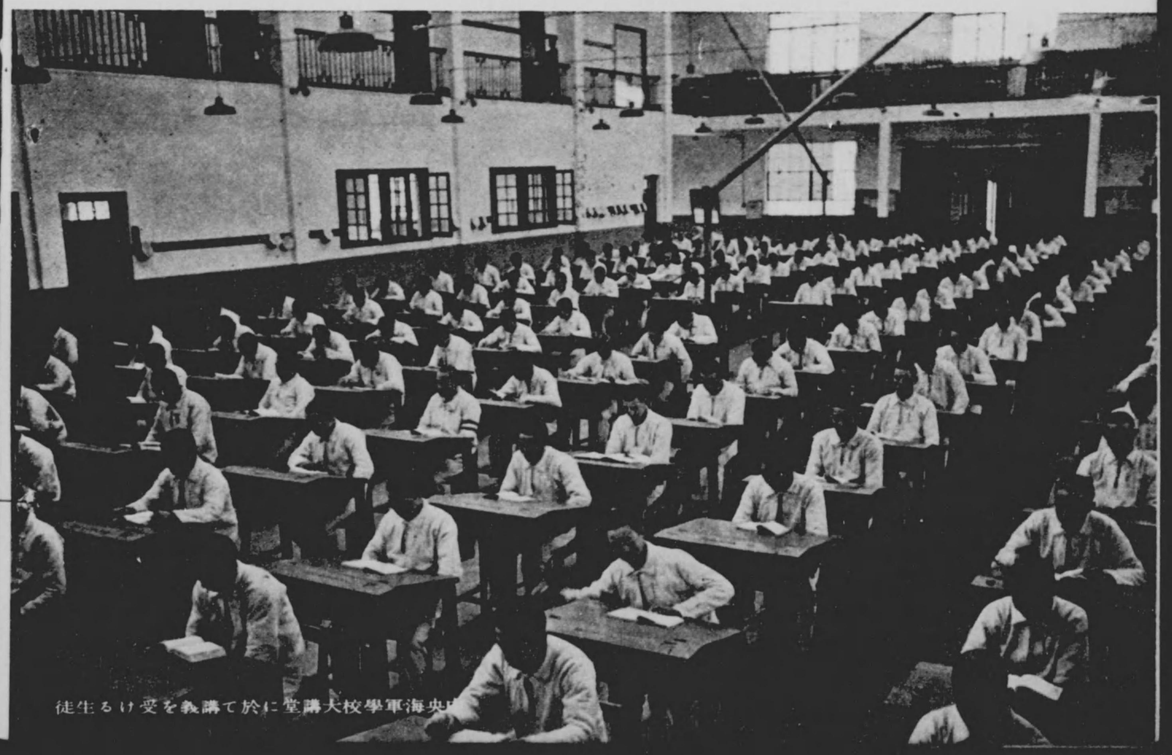


讓渡艦「海興」



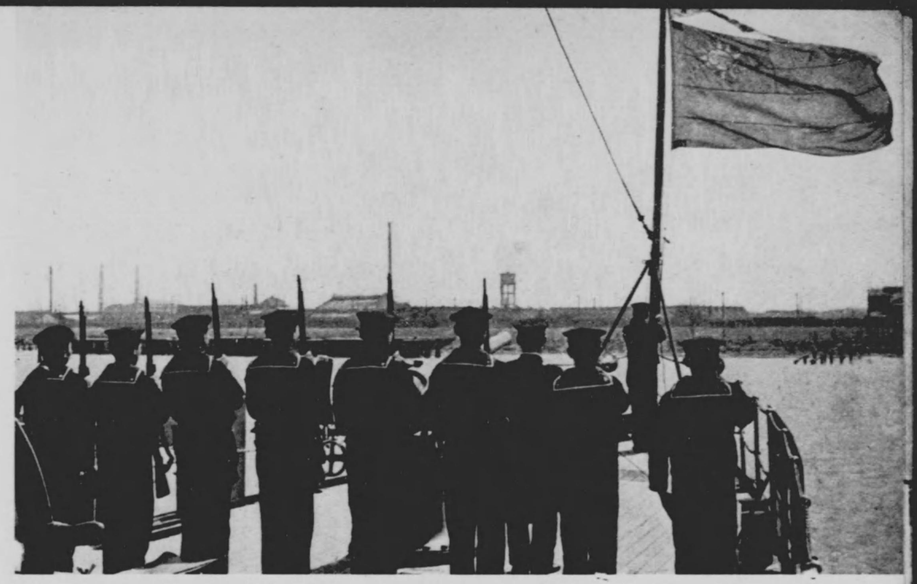
中國海軍中央海軍學校

中國海軍・中央海軍學校

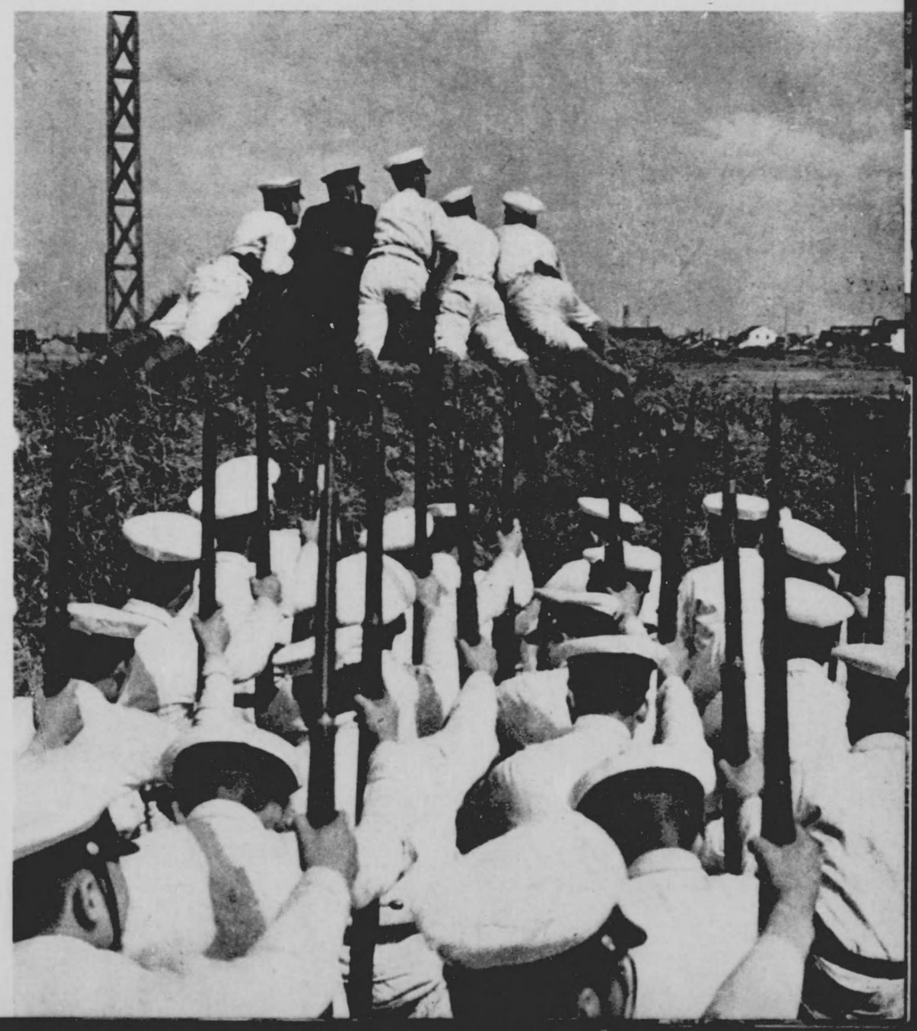


中央海軍學校大講堂に於て講義を受ける生徒

大東亞戰爭と海軍



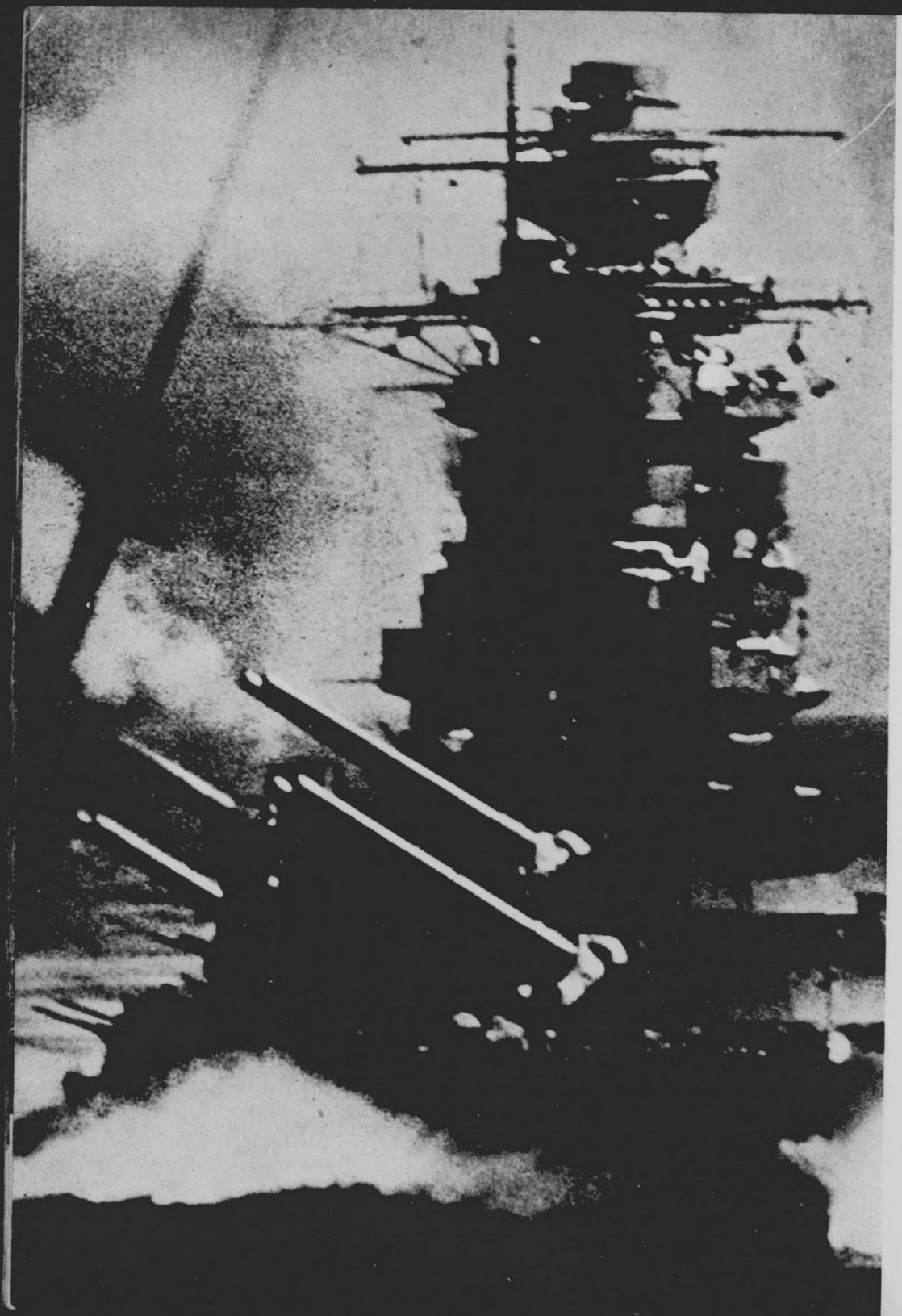
員組乘るす掲揚を旗國の府政國中新に［興海］



新中國の中央海軍學校は上海の西南、南市にある。姜西園海軍中將を校長とし多數の教官、教員が配せられ、全支那各地より募集せられた生徒數百名を收容し、將來中國海軍の骨幹となるべき將校の養成に當つてゐる。

帝國海軍はこれに指導官以下多數の將校下士官を送り、又必要な教材、其他を供給して熱心に協力してゐる。

斯くて更生中國海軍は無敵海軍のよき指導と協力の下、日毎に教育の發展向上を續けつゝある。



大東亞戰爭と海軍

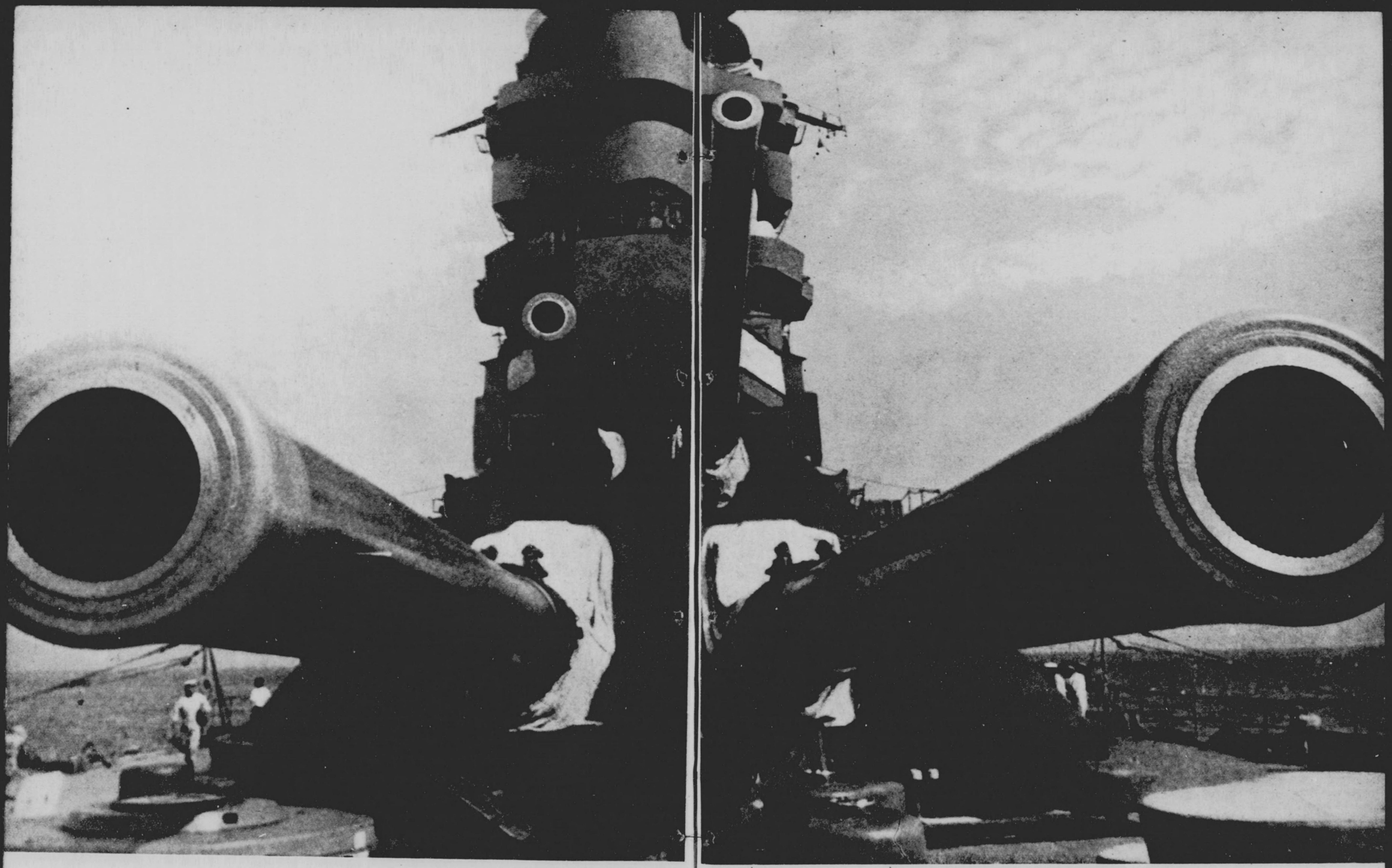
日露戰役このかた約四十年、帝國海軍の實力は、これを擧げて揮ふ機會はなかつた。僅かに第一次世界大戰にその片鱗を窺はせたのみで、他は孜々として錬磨の明け暮れ。その間米英の謀略はワシントン、ロンドン兩會議の政治攻勢となり、五五三の劣勢比率を押つけ、以て我が戰力を低下せしめ得たと安んじてゐた。量を知つて質を思はざる憐むべき戰略、そこに胚胎した我が實力に對する過小評價は、やがて滿洲、支那兩事變を通じての對日恫喝の反覆、いはゆるABCD包圍線の壓迫となり、然も隱忍自重ひたすら事態の平和的解決を希求する帝國を目して、戰意全く無しと速斷し、飽くなき妨碍の手を推進めて來た。彼等の對日侮蔑の根抵には、我が戰備とりわけ海軍力への盲目があつた。

果然、昭和十六年十二月八日未明、米英自から拾つた火中の栗は、彼等をして大火傷を負はしめることになつた。眞珠灣にマライ沖に、また比島に香港に、或はグアムにウエーキに、五五三は一擧に所を換え、數世紀に亘る東亞の事情は一變した。

この新らしき歷史を創つたものこそ、實に帝國海軍に外ならない。自から恃んで驕らず、一朝蹶起の機に會ふや、傳家の寶刀石火の間に亂麻を斷つ。加へて海に陸に空に、戰ひつゝ力いよいよ充ち、威ますます猛し——全東亞の信望こゝに集まる所以である。

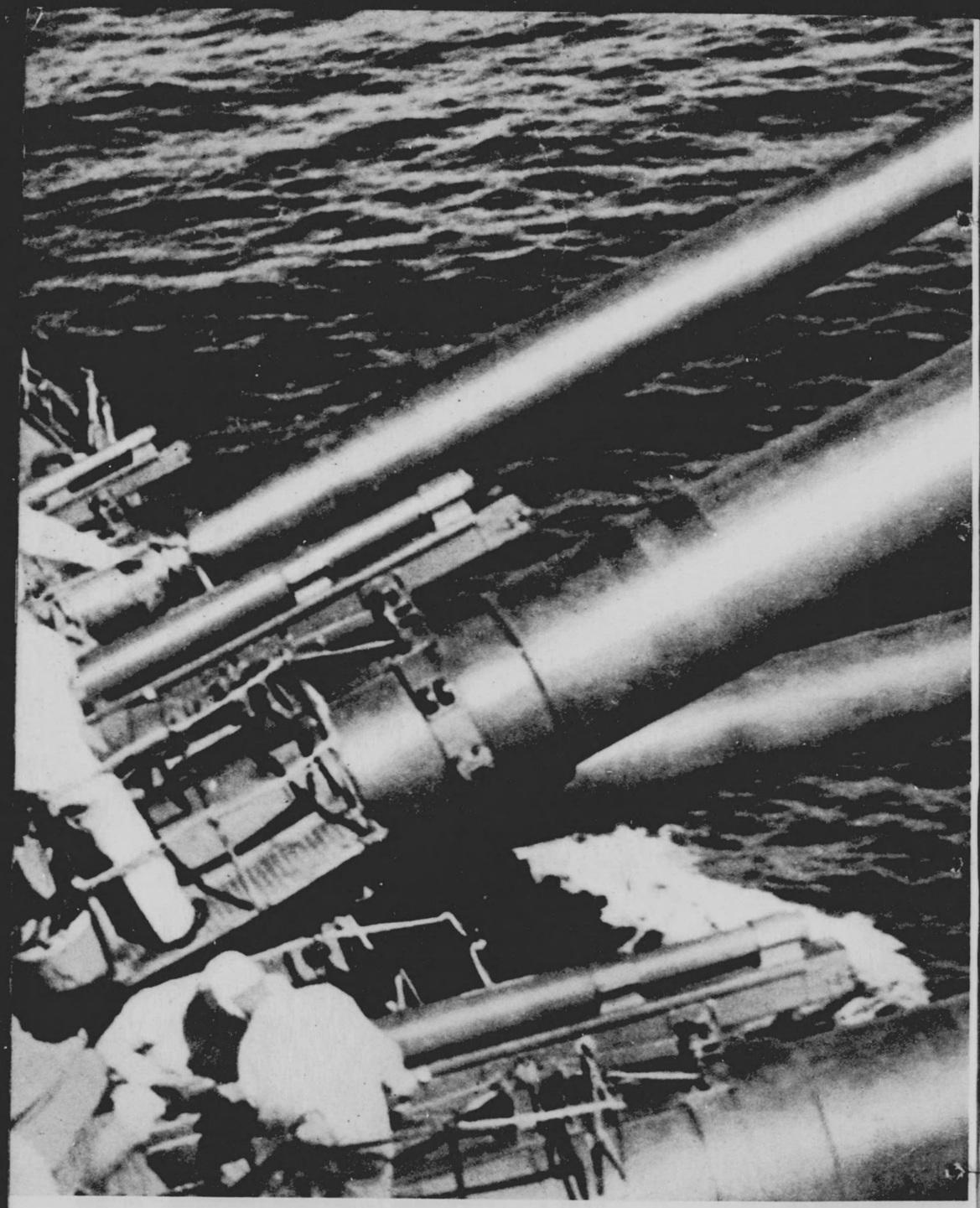
れの海ら姿をはをを壓觀、す艦こ連式の城の眼のそで威の見、度、

空び耳を毎に蔽に聽ふ、く群帝の翼國での海あの壯軍る、躍。わ進

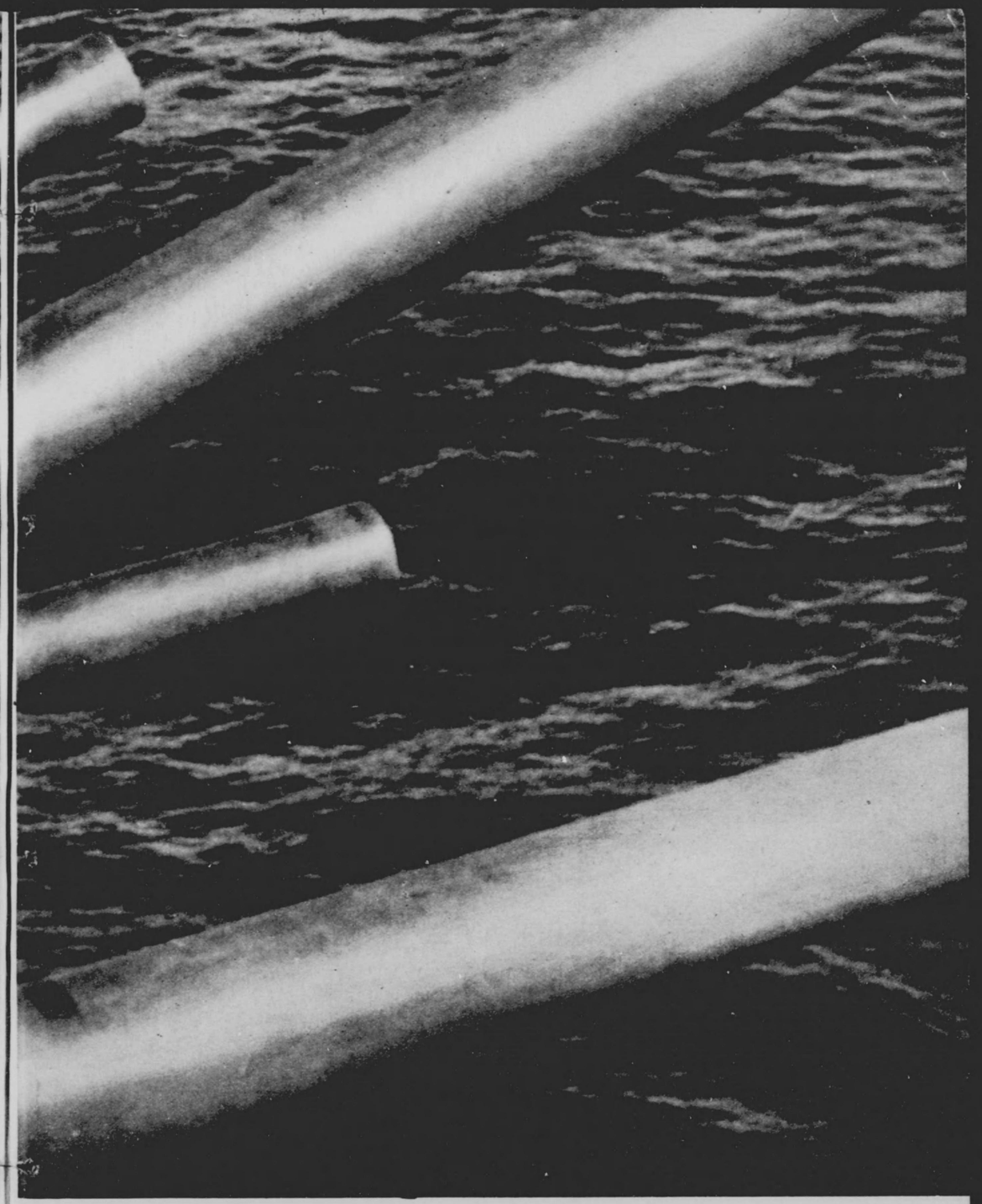


守る も 攻 も る む 黒 鐵 の 威 容
皇 國 こ れ あ つ て

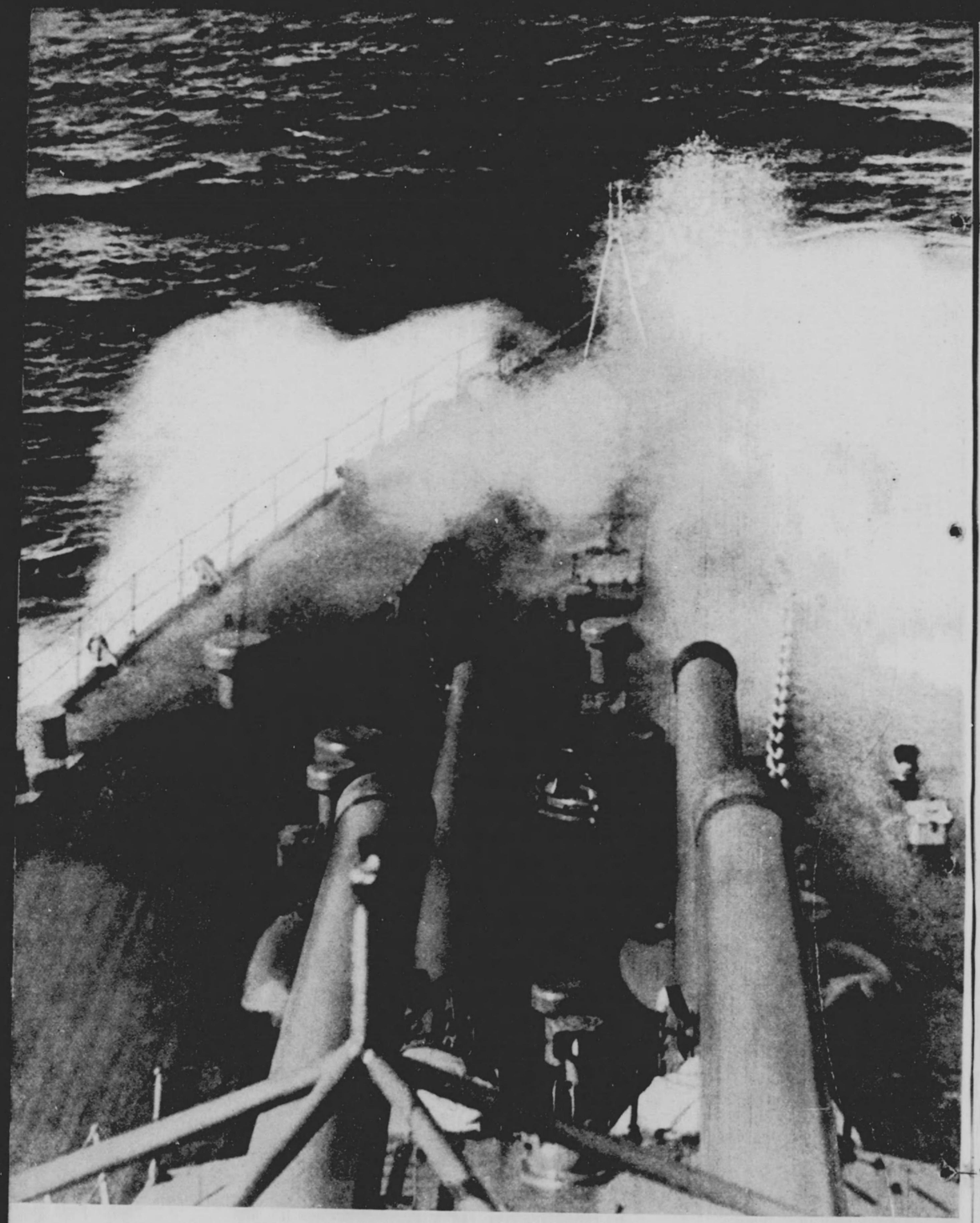
、く 征 は 隊 艦 、々 堂
。ず せ 動 微 た ま 亞 東 、く 寧

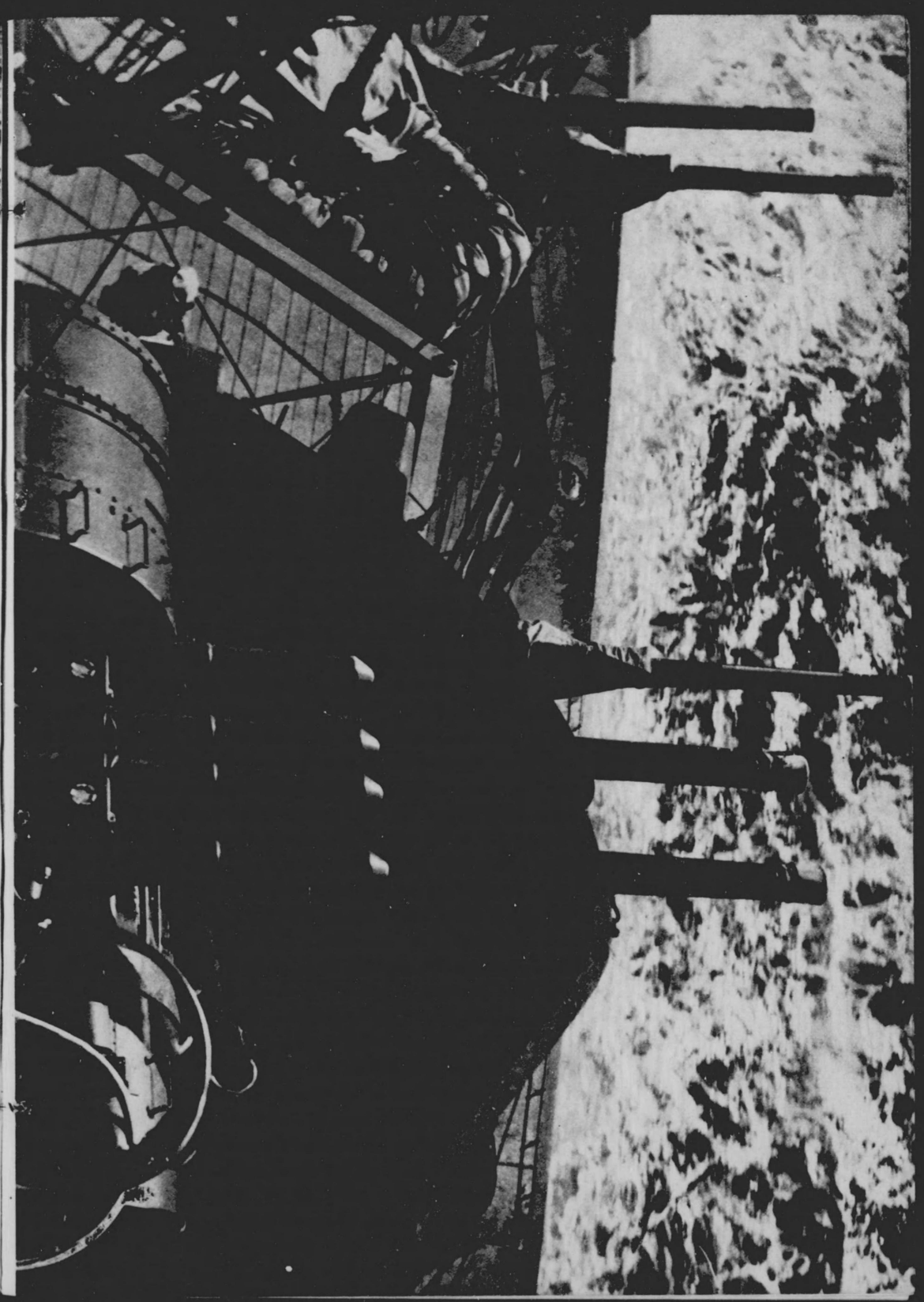


力以下序列を追つ
狹しと波を截つて颯爽！

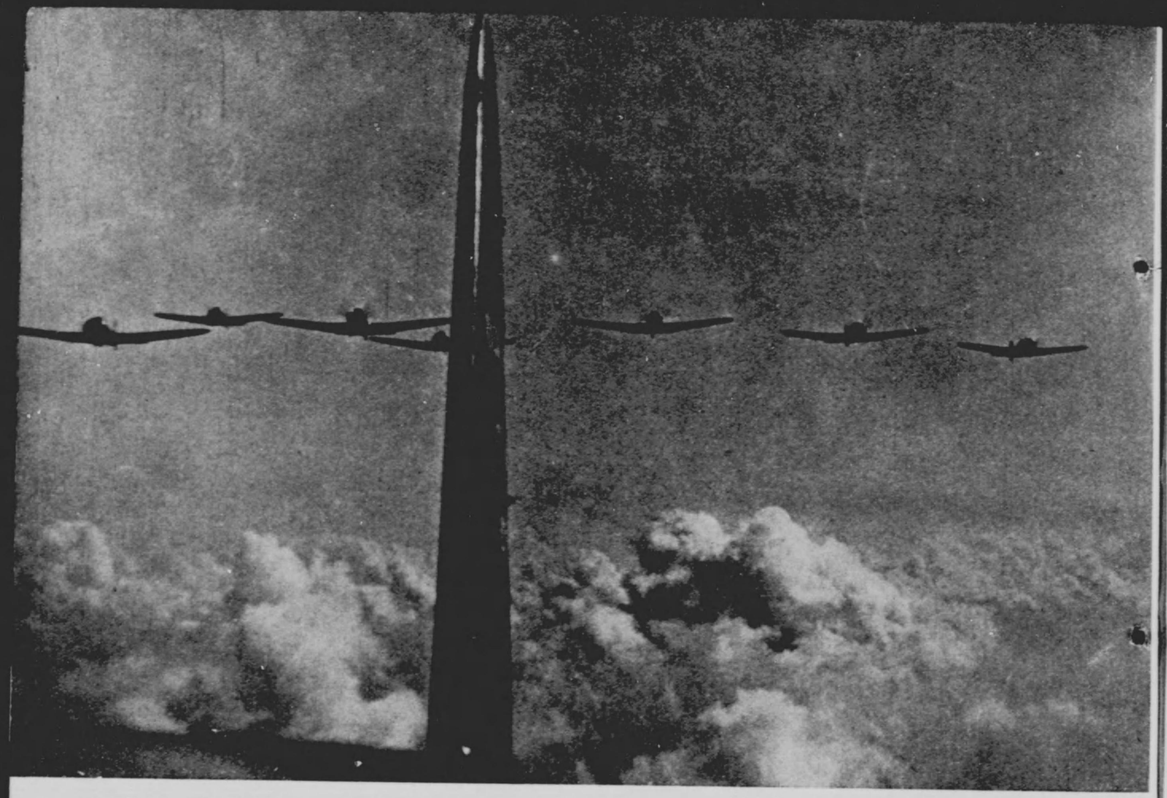


主、頭先艦旗に常やふ戰
洋七、ずれ亂糸一て

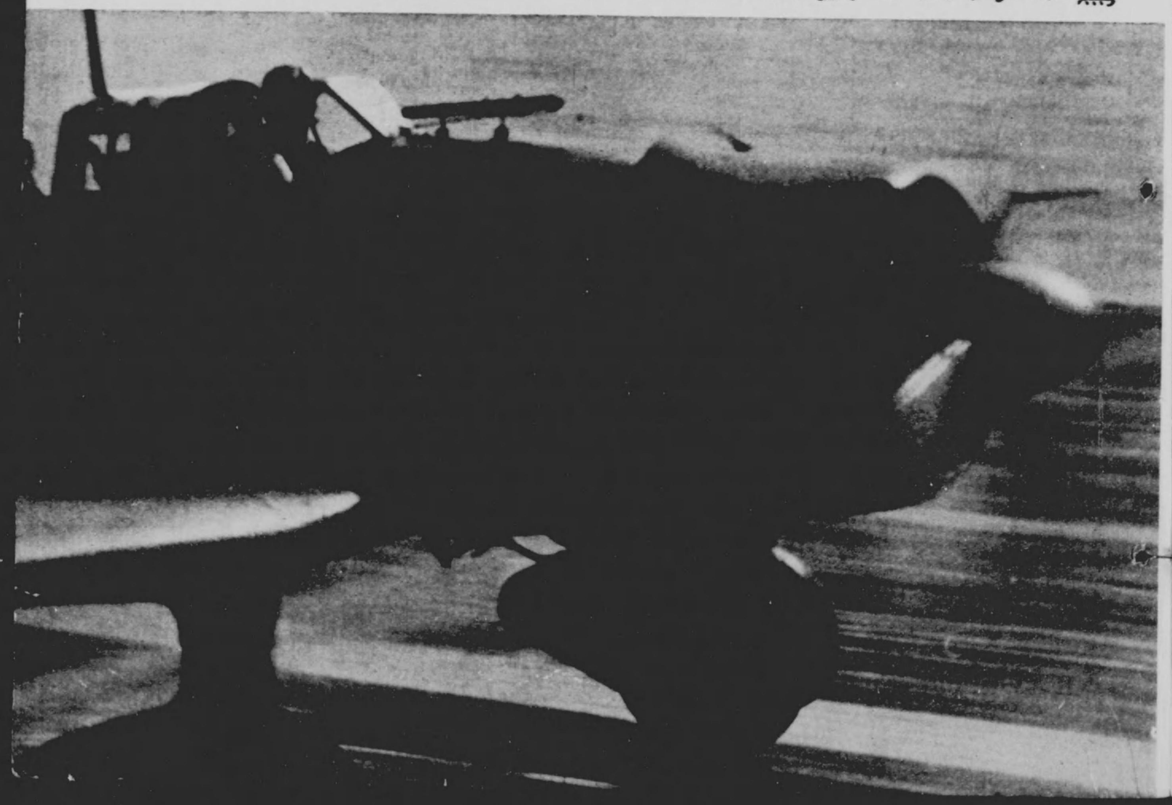


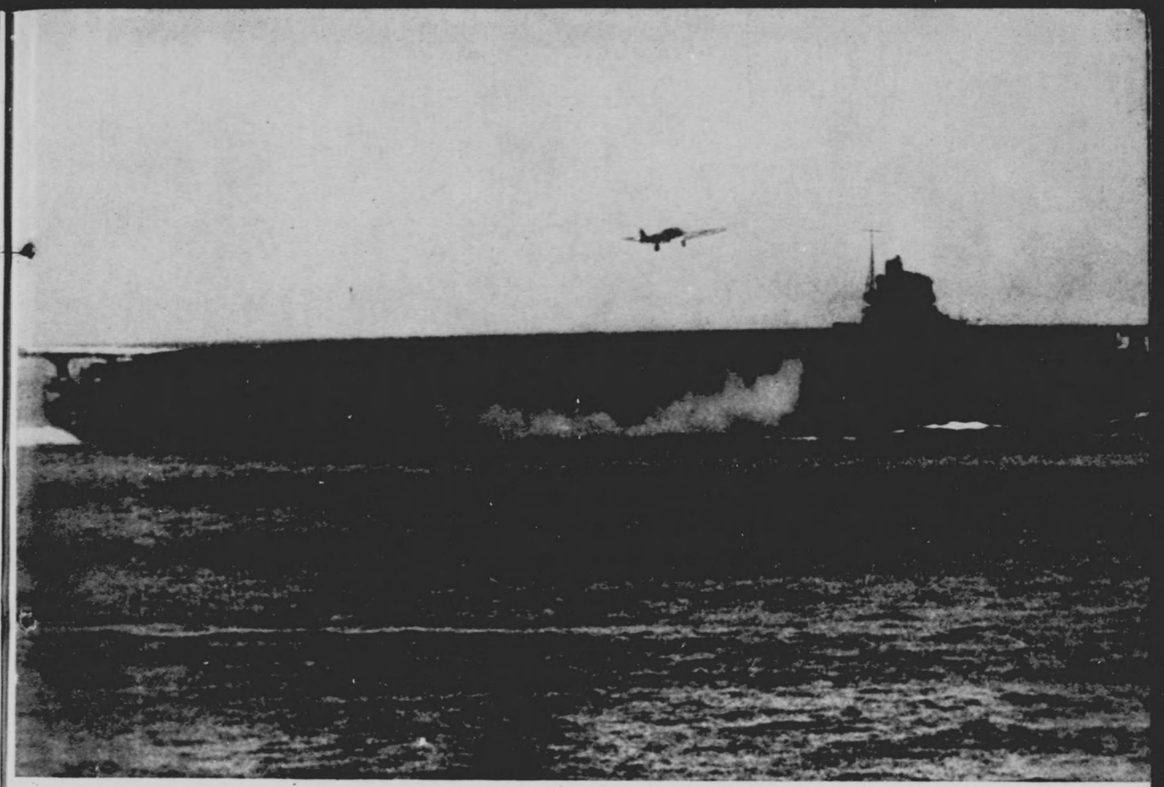


實すへ覆に氣一を三對五、ずは問を英米のもむ阻を路針
。慨氣の進邁往勇ぬれ怖でん履を正、しな他、來由の力

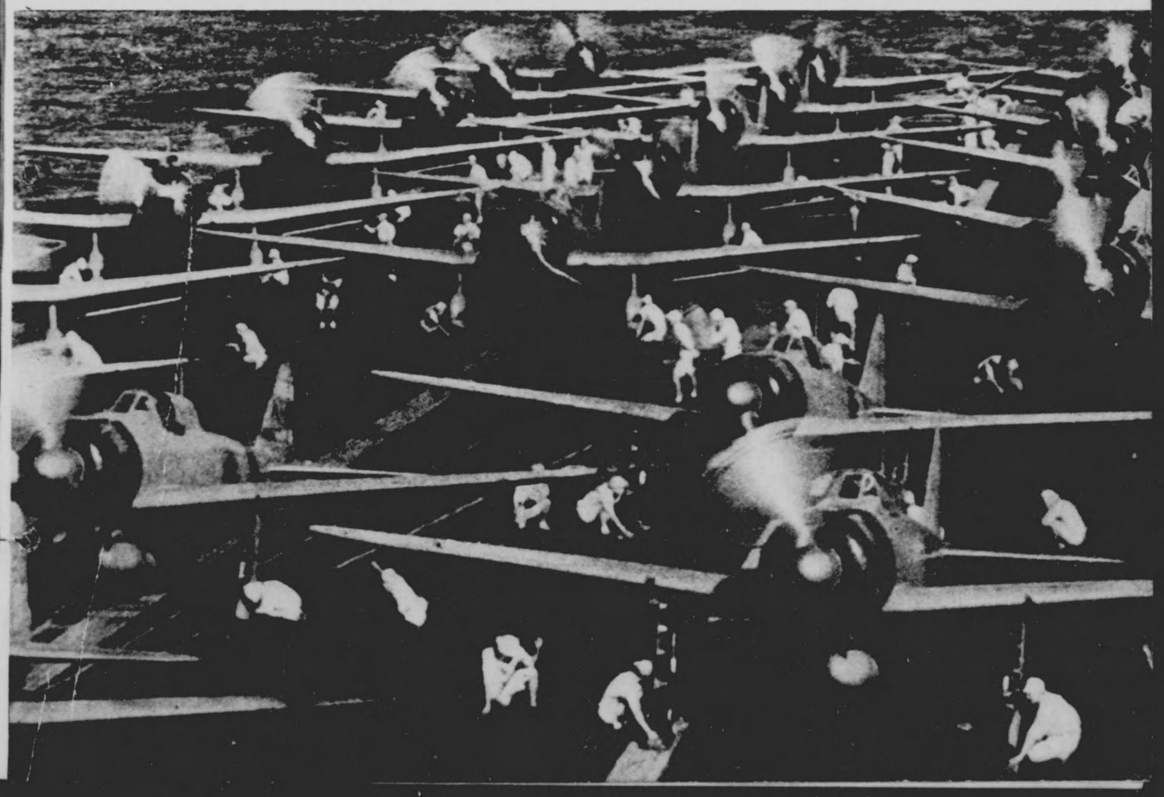


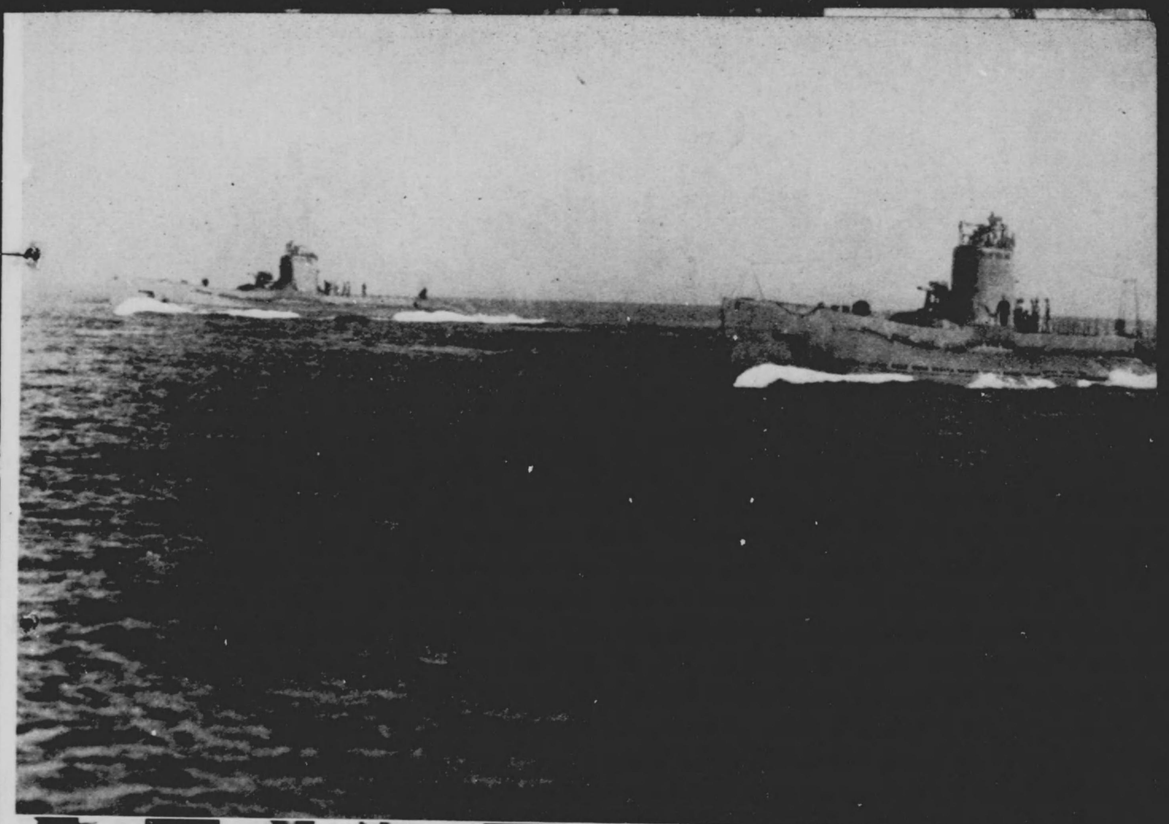
。るあで母の利勝とこま、そこ女彼るた母の驚

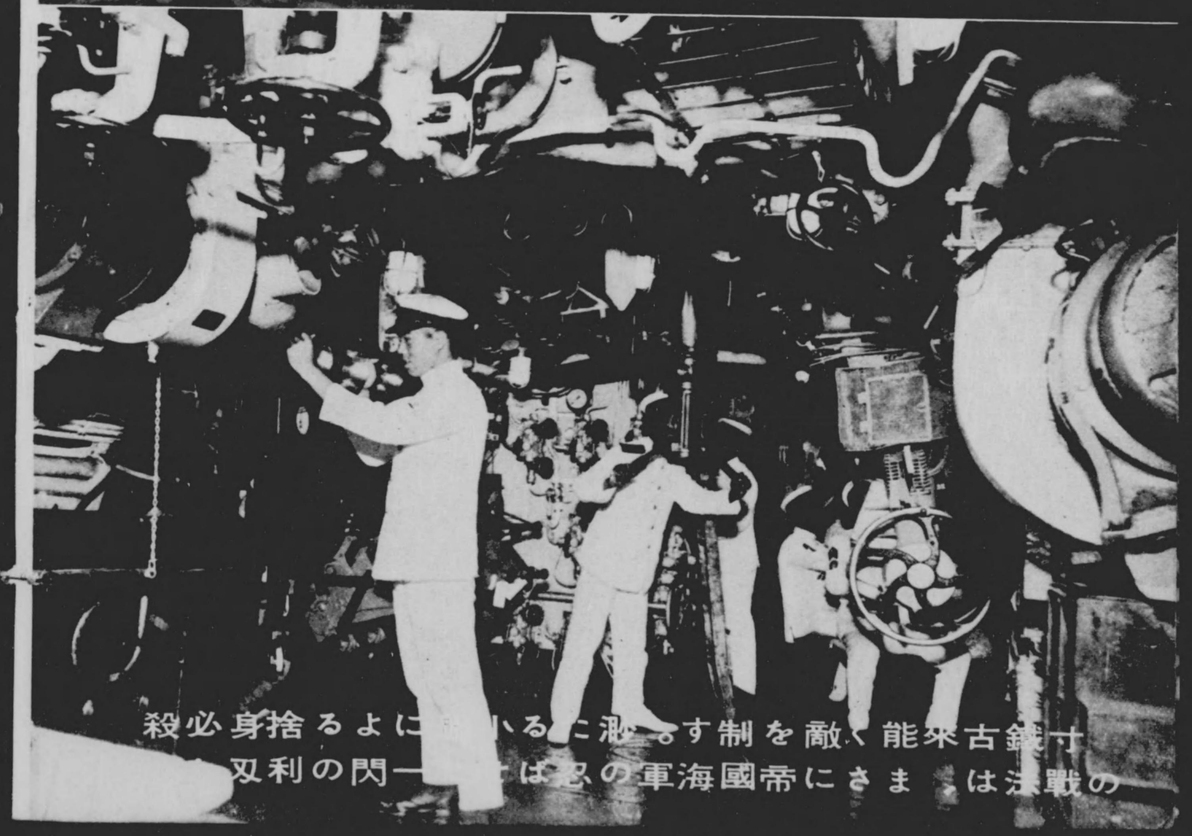




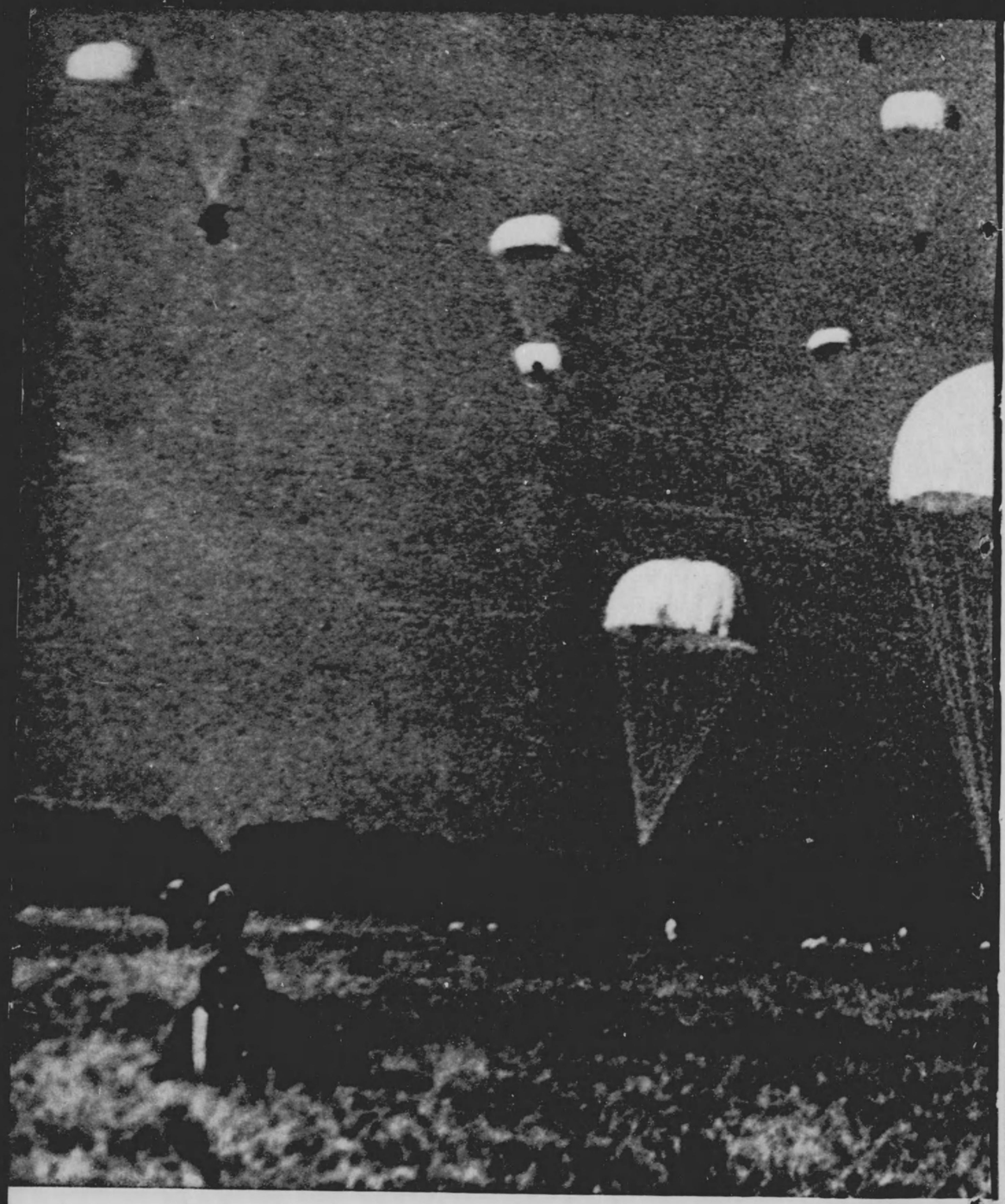
猛のそ、力戦空航はるす決を雄雌の戦海代現







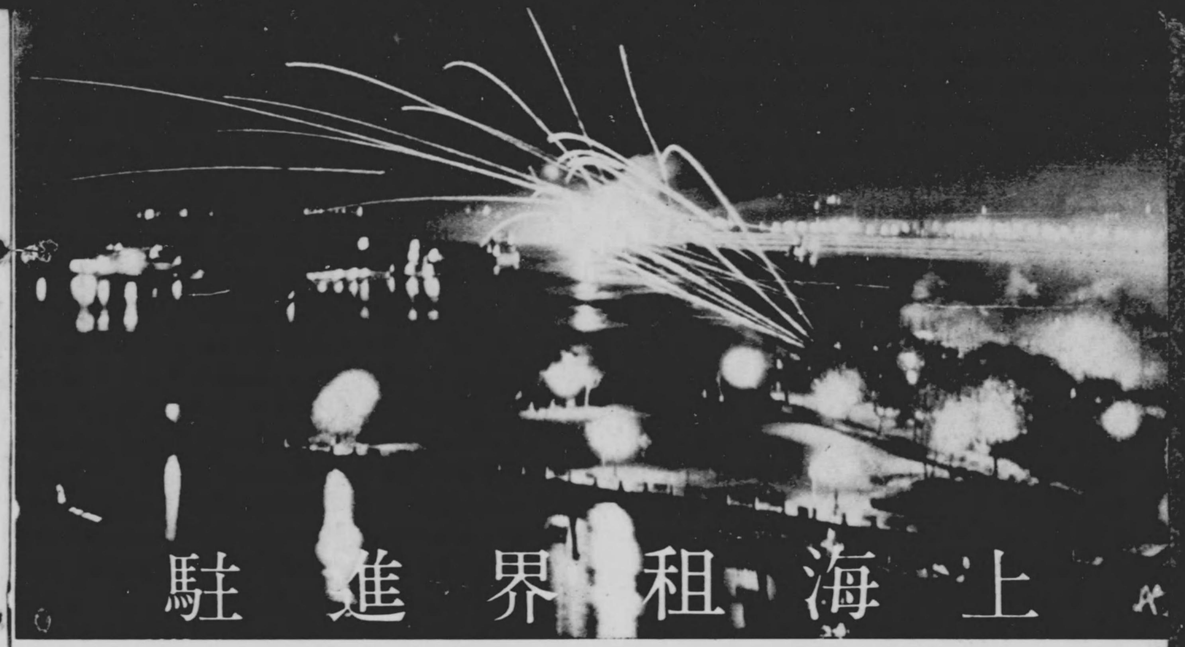
殺必身捨るよに[illegible]いるに渺さす制を敵く能來古鐵寸
双利の閃一[illegible]は忍の軍海國帝にさま[illegible]は決戰の



輪の花、花、花、これ
た歴史の美花でもある。

碧一色の空に咲いた大
は東亞の朝暾を飾つ

上海租界進駐



第一撃を受けた利那のペテレル号（最左端がペテレル号）

上海租界

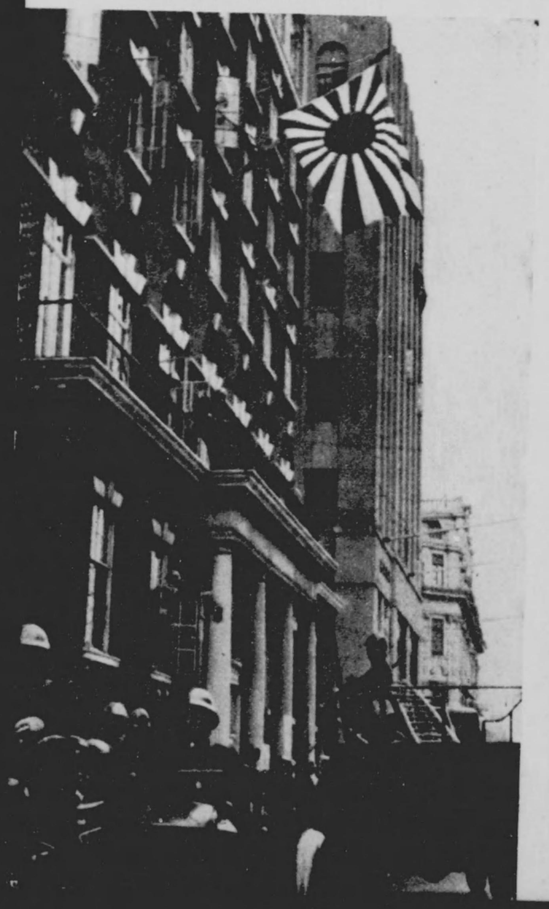
大上海は甦つた。昭和十八年八月一日上海共同租界の國府返還は成し遂げられた。

かつて魔都と呼ばれたのも故なきに非ず、一世紀に亘る米英の支那侵略の足場となつたのはこの租界である。米英の對華投資のうち銀行業と商業貿易に八割、工業と不動産に七割を集積し、東亞經濟を牛耳らんと策謀したのもこゝなら、支那事變に日華離間陰謀の巣に供されたのもこゝ。租界解消して上海、否全中國に朗色漲る。眞の再建はかくて始まつた。

租界に進駐する陸戰隊

上海海軍根據地隊司令部

邦人の歡呼に送られて租界進駐



アメリカン倶樂部を占領

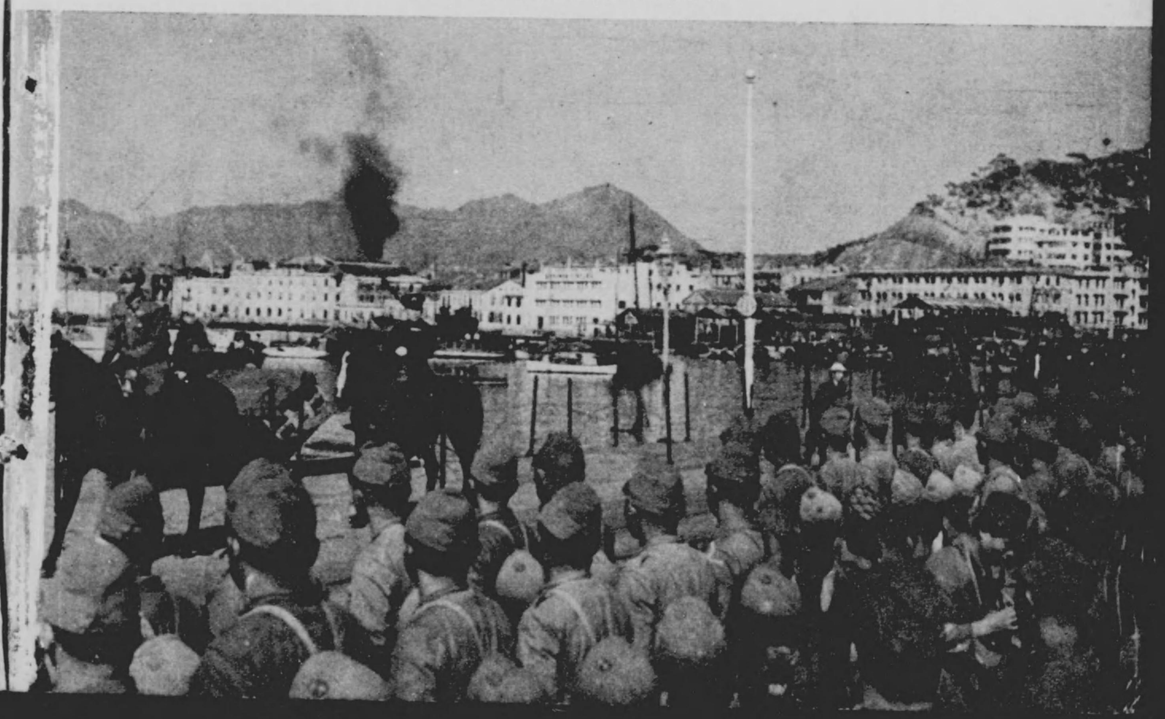
占領建物に海軍の布告を貼る

香港攻略

市街戰に活躍する陸戰隊

山街戰に嚴然と構へる海軍機銃隊

香港入城、行進の陸海最高指揮官



香港島の捕虜

敵の閉塞船

運の盡きを俗に「百年目」といふ。イギリスが阿片戰爭に乘じて、清國から香港島を强奪したのは一八四二年、爾來彼はこの地を最有力な前進基地として、東洋に飽くなき魔手を揮つた積惡は知る人ぞ知る。昭和十六年十二月、遂に天譴は下つた。阿片戰爭から指を繰つてまさに百年目である。唇破れて齒寒し、香港陷ちて新嘉坡間もなく潰え、イギリス總退却の日は來た——彼の運の盡きは東亞民族の開運、香港は今や新生の朝夕に、本來の面目を取戻しつゝある。

編輯後記

本書の刊行は去る昭和十六年二月、當時支那方面艦隊報道部長たりし間直顯海軍大佐殿（當時中佐）に依つて計畫せられた。

直ちに刊行委員會が現地上海に設置され、部外より國際報道株式會社名取洋之助氏、同盟通信社寫眞部藤井信次郎氏、部内からは報道部員高橋弘海軍主計大尉殿、同岡市正大囑託、同樺山丑二囑託等が委員となり、間大佐殿は報道部長の劇務の裡にも委員長として終始熱心に采配を振られた。

斯くて編輯その他諸般に亘り愼重なる準備が進められて來たが、その間幾多の國際情勢の變化あり、遂には大東亞戰爭の勃發に際會し我々も亦他に爲すべき多くの任務を持つに至つた。然し乍ら兎も角も本書をして支那事變に於る帝國海軍の記錄寫眞帖として永く靑史を飾るものたらしむべく我々は能ふる限りの努力を傾注した次第である。

編輯會議は上海に、東京に前後十數回重ねられ粒々苦心蒐集された記錄寫眞四千葉から茲に約五百葉が嚴撰された。

特に本書の爲めに歷代支那方面艦隊司令長官長谷川淸海軍大將閣下、及川古志郎海軍大將閣下、島田繁太郎海軍大將閣下が題字を寄せられたことは誠に感激に堪えない次第である。

本書が編輯を了する直前に於て間大佐殿は轉出せられ、後任鎌田正一海軍大佐殿の手に依つて漸く完成を見たのである。又、高橋大尉殿は終始渝らず熱心に指導援助されたことは共に我々の深く感銘するところである。

掲載の寫眞は支那方面艦隊報道部寫眞班（故今里亮介、故石毛馨三、山端庸介、北川久作、大畠達夫）の決死的撮影を中心とし、之に加ふるに海軍省、同盟通信社寫眞部、朝日新聞社、每日新聞社、讀賣新聞社、國際報道株式會社の各寫眞部提供による貴重な寫眞を以てした。

解說記事は同盟通信社特信部、寫眞並に記事の整理、裝幀、その他製作一般については國際報道編輯部、同美術部に負ふところ最も大であつた。

最後に昭和十六年九月長沙作戰に從軍中散華した支那方面艦隊報道部故今里寫眞員、本書編纂中にカメラと共に公務に斃れた石毛海軍報道班員をはじめとして本事變に報道戰士として參加し、或は斃れ、或は傷き乍らも活躍せられたる人々の偉業に對し茲に心からなる感激と感謝とを捧げるものである。

昭和拾八年拾二月

支那事變記念海軍寫眞帖刊行會

編纂監輯　報道寫眞海軍作戰記錄大陸篇

支那方面艦隊報道部内
支那事變記念海軍寫眞帖刊行會

東京都京橋區木挽町壹丁目廿三番地
國際報道株式會社
代表者　名取洋之助

東京都品川區東大崎壹丁目五三二番地
光村利之

東京都品川區東大崎町壹丁目五三二番地
株式會社光村原色版印刷所

東京都神田區淡路町貳丁目九番地
日本出版配給株式會社

東京都京橋區木挽町壹丁目廿三番地
國際報道株式會社

日本出版文化協會員番號一一〇五四六番
電話京橋(56)〇二六九・一八九八・二五〇九番
振替口座東京一六九六四六番

昭和十九年一月十五日印刷
昭和十九年一月二十七日發行
出版會承認い五〇三四五號
（三千部）

㊕定價金拾圓
特別行爲稅相當額金七拾錢
賣價金拾圓七拾錢

980
130